□　器楽（室内楽を含む）

渡　辺　　和

コロナ禍も落ち着いた2023年，器楽室内楽ジャンルの記念年とすれば共に生誕150を迎えたラフマニノフとレーガーが重要だった。が，前者はブームとなり内外のピアニストが盛んに取り上げるも（上原彩子&松田華音ラフマニノフ・ピアノ・デュオ６月７日サントリーホール等），後者はレーガー専門家オルガニストの池田泉オルガンリサイタル（11月21日福岡チャペルプリエール）程度に止まったのは残念である。

◆変化する独奏コンサート

急激に進行する円安下でも，外来スター演奏会はそれなりの数が維持された。以下，サントリーホールや東京オペラシティ規模の大ホールでリサイタルや二重奏を行った若手から中堅の外来器楽奏者を列挙，詳細はデータ欄を参照されたい。１月ファジル・サイ（29日すみだトリフォニー，31日福岡シンフォニーホール），２月ダニール・トリフォノフ（10日サントリー），３月ブルース・リウ（１日ザ・シンフォニーホール），９月アンドラーシュ・シフ（29日オペラシティ），10月レイフ・アンスネス（23日オペラシティ），ギル・シャハム（31日オペラシティ），11月アリス＝紗良・オット（30日すみだトリフォニー），12月ヴィキングル・オラフソン（２日サントリー），等。

トッパンホール，紀尾井ホール，王子ホール，いずみホール，フェニックスホールらディレクターシップが明快な中小規模音楽専用ホールでは，欧州で評価の高い奏者がリサイタルや二重奏で先端の解釈を披露した。名前のみ記せば，パトリシア・コパチンスカヤ，クリスティアン・テツラフ，ティル・フェルナー，ジョヴァンニ・ソッリマ，マルティン・シュタットフェルト，アンヌ・ケフレック，ジャン＝ギアン・ケラス，ダニエル・オッテンザンマー，フランチェスコ・トリスターノ，イゴール・レヴィット，アンドレイ・ガブリーロフ，ピエール＝ロラン・エマール，等。

邦人外来を問わず，長老演奏家の活動も活発だ。サントリーホールで80歳記念演奏会を祝った堤剛（８月31日）の充実ぶり，東京で半世紀続けた《ゴルドベルク変奏曲》終了を宣言後に敢えてチェンバロ一台で巨大な福岡シンフォニーホールに挑んだ小林道夫の挑戦（３月３日）は，日本を代表する巨匠の偉業である。別府アルゲリッチ音楽祭では，アルゲリッチとチョン・キョンファの初共演が国際的な話題となった（５月19日別府ビーコンプラザ）。他にも，ロシア情勢に関わらずピアニストとしても来日を重ねるミハエル・プレトニョフ（２月28日オペラシティ他），教育活動も活発なピンカス・ズッカーマン（５月８日紀尾井他），84歳にして作曲家としても評価されるハインツ・ホリガー（９月19日東京文化会館小他），京都東寺野外公演を含む大会場ばかり５公演を敢行したヨー・ヨー・マ（10月29日サントリー他），独自の道を歩むクリスティアン・ツィメルマン（12月４日サントリー他），10年ぶりのツアーが話題となったスタニスラフ・ブーニン（12月９日サントリー他），らが強い印象を遺した。

旧来型演奏会と異なる客層の存在が顕著になった一年だった。「ちょい悪」スタイルを前面に立てたヴァイオリニスト石田泰尚率いる男性弦楽器奏者による石田組や，古澤巌や高嶋ちさ子らは，高齢化が進む既存聴衆とは異なる層からの人気を得る。個人所有小規模スペースを会場に音楽ネットワーク「えん」などが若手奏者で展開するサロン・コンサートは，「逢いに行けるアイドル」クラシック版のインディーズとして，今や無視出来ない勢力となりつつある。2022年に名古屋で復活したスタジオルンデや，京都の名物スポットとなったカフェ・モンタージュらの活動も，同様な嗜好の反映であろう。

コロナ禍でのSNSや配信の爆発的普及を背景に，音楽的才能や高い技術を有するだけでなくルックスやキャラクターも際立った若手ソリストが新たな聴衆層を開拓しつつある。とりわけ反田恭平，角田隼人，藤田真央，阪田知樹，牛田智大，亀井聖矢，高木竜馬ら男子ピアニストの世界では，CDはライヴ会場でのグッズとして割り切り，YouTubeやインスタグラムで発信，旧来の音楽メディアや評論家の評価とは無縁な「ヒット数」「再生数」で新スターが発掘されつつある。2022年度での文化庁芸術祭賞廃止や去る７月号を以ての『レコード芸術』誌廃刊を鑑みるに，本年鑑を含む音楽界の枠組み見直しも急務であろう。

◆アンサンブルの動向

コロナ禍で最も大きな影響を被ったのは，常設型室内アンサンブルだった。若手ばかりか評価の確立した弦楽四重奏団らでも活動停止やメンバー交代が相次いだ。最悪の状況は脱したといえ，常設室内楽団体は持続可能性の乏しい形態と敬遠される傾向も。結果，トッパンホール（３月13日ヴィトマン，４月25日トッパンホールアンサンブル，５月28，29日リゲティ生誕記念等），ハクジュホール（８月18から20日ギター・フェスティバル等）等々，ホール主導のアンサンブルが目立つこととなる。他にも，内外楽団をベースとする室内楽の活発化（ベルリン・フィル八重奏，コンセルトヘボウ・ブラスアンサンブル等），テレビ番組が結成し指揮者藤岡幸夫がプロデュースするThe 4 Players Tokyoの弦楽四重奏の壁を越えた集客力など，活動基盤を安定させる努力は様々だ。

室内楽の大きな供給源であった音楽祭では，３年の休止を経て原点に返ったラ・フォル・ジュルネ（５月４から６日東京国際フォーラム）以下，金沢の「風と緑の楽都音楽祭」（４月28日から５月５日石川県立音楽堂），「びわ湖の春音楽祭」（４月29，30日びわ湖ホール）等の黄金週間イベントが復活。その一方，秋に音楽監督西村朗を失った草津や，50年を前に意欲的過ぎる演目の集客力を問われる木曽など，老舗音楽祭が見直しの時期を迎えている。

無論，常設タイプの室内楽団来日は続いている。年明けのディオティマQから，ドーリックQ，ロータスQ，エリアスQ，大阪国際２位以降欧州評価高まるノトスQと続く。夏以降もQモディリアーニと庄司紗矢香の演劇コラボに始まり，11月はQベルリン東京，ジュリアードQ，ハーゲンQ，カザルスQと大挙襲来，師走にはフォーレQ公演もあった。とはいえ，招聘にあたっての韓国や台湾，中国などとの連携の努力はコロナ禍前より薄まった印象は否めない。

５月には2020年開催予定から延期を重ねた大阪国際室内楽コンクール＆フェスタが６年ぶりに開催，Qインダコとカピバラ・ピアノ・クァルテットが優勝した。特に後者は世界でも珍しいピアノ四重奏団の栄冠で，将来が大いに期待される。近々の国際コンクール上位邦人団体では，ミュンヘンARD大会入賞のQアマービレやQインテグラは活動の転機を迎えつつあるものの，同コンクール優勝の葵トリオが教育活動にも進出し順調な成長ぶりを見せるのが嬉しい。